

久米島見聞誌

小 牧 實 繁

は し が き

海中の島嶼が一の地理的區域を構成することは餘りにも明白な理窟であるが、この明確な地理的單元の地誌的敘述を試み度いと云ふのが早くからの余の願望であつた。そして斯かる島の一つとして選んだのが沖繩諸島の中の久米島であつた。

久米島を選んだのは別に大した意味がある譯では無く、唯沖繩諸島が大日本の縮圖であると云ふ様なことが唱えられたことがあり（柳田國男、海南小記）その縮圖の又縮圖にもなるかと思ひ沖繩諸島中の一島として深い考慮など拂ふことなく久米島をとつたに過ぎぬ。

久米島を嚴格な意味に於いて日本の縮圖の又の縮圖と考へることには余自身に於て異論があ

る。即ち日本全體の中には色々の要素が含まれて居り、其の中に於ける人文現象にしてもそう簡單なものではないのであつて、久米島一島にその複雑な日本を何分一かに縮少したものを見得るとは直ちに考へられないことは極めて明白な理窟である譯であるが、一の地理的區域を構成して居ることは依然として明白である。

一の明確なる地理的區域を構成して居るからとて勿論他と全然關係なく孤立した地區をなすと云ふ意味では毛頭ない。海に繞らされて居て地理的單元としては、之れ程明瞭なものがなく他地區との相互關係は勿論あるに違ひないにしても、之れ丈だけで大體纏つた地域をなすと云ふに過ぎぬ。

海上の交通を否定し得ない以上久米島も世界

の有機的統一體の一部を構成するものであるに違ひはないが、大體その島を一の單位と見て其の地誌を記述することは勿論是認せらるべきことであるのみならず、之れを實際上から云へば學問は要するに調べて而してそれを或る程度に纏めればいゝのである。そんな事を考へながら兎に角久米島に渡つたのであつて、大正十五年七月十一日から、同十九日まで約一週間島内を踏査したのであるが、一小島と雖も僅かに一週間の踏査では何も解るものではない。そんな日程を作つたのだから全然失敗であつたのに氣付く。再遊を期して今少し完全に近い調査をして見度いと思つて居たのであるが、當分その目的が達せられ様とも思へぬ。然しながら當時調査に當つては愉快な思出も多く、又島内諸氏の厚意によつて多少は調べもつて居るので之れを全然暗黙の中に葬り去るにも忍びない。即ち此の一文を草する所以である。

七月十一日 米島丸と云ふ小發動船に身を託して那覇港を出る。海は荒く船は小さく、可な

りの難航で心細いこと限りないが船長は到底も自分に親切で、親船に乗つた氣持である。午前九時から午後五時半まで中食抜きで狭い船頭室に身を横へた切りで退窟と苦痛そのものゝ中に漸く久米島に着く。久米島に着くと退窟と苦痛は忽ちに消散した。面前には久米島と云ふ奇異なる世界が展開せられて居るではないか。隆起珊瑚礁上には蘇鐵や榕樹が自生して居るのが見られる。南國である。二人の男が木の棒で何か黒い塊を擔いで行くのが見える。黒いものは時々奇異なる唸りを發する。同船の沖繩中學生の久米島に歸省するものに聞けば之れは豚であると云ふ。支那へ來たんだと思ふ。具志川村島島に上陸する。具志川の聚落には瓦葺の家もあるにはあるが、多くはかや葺である。嘉敷旅館に入る。嘉敷旅館と云へば名前はいゝが、いふせきくづや葺の家で、主婦は通譯なくては日本語を解しないものである。手に入墨みを有し恐ろしい様な女であるが、親切は親切で、外國人が來た様に珍し相に自分を見る。此の村に旅館三軒

あり此の嘉敷が一等であると云ふから驚く、遠くも來つるかなの感なきでない。

七月十二日 午前七時起床、九時出發、久米島を北方に横斷する。鳥島の北方には隆起珊瑚礁でない岩石の露頭を見る。古生層の砂岩の様に見えるが實は安山岩である。此の邊には多く唐芋が栽培せられて居る。又砂糖蔗、稻が耕作せられて居る。その他粟が耕作せられて居るが之れは餘り多くはない。又帽子製造用のアダンが植えられ、僅かではあるが唐モロコンが植えられて居るのを見る。自生の植物としては蘇鐵を田圃の中に見る。又西銘の附近では南瓜(ナンカー)人參、アロールト(葛の材料)等が少しながら栽培せられて居る。

高見より望むに鳥島の聚落を隔て、南方の海中には堡礁に白く波浪の碎けるのを見る。

風俗として面白いことは乙女などが馬に乗つて歩くことである。

西銘の民家には眞竹の垣を繞したものがあつた。これは石垣よりも衛生的であると云ふ。第一昔

は石垣は身分の卑しいものには許されなかつたのであると云ふ。

此の附近には植物としては、ウスクノキ、梅^{ダイダイ}、フクキ、ハマシマボウ(方言ユーナ)、クバ樟、ゲツケツ(印材として用ふ)等がある。

風俗としては頭に唐芋を戴せ帯を前に結んだ女子、馬に乗つて交通する男子が珍らしく眺められる。

具志川小學校に至り、現校長で久米島の舊家濱川昌俊氏に面會し氏の談に聽く。

具志川村の記録は廢藩の時全部焼却せられて今日は存在せず却て村の歴史は球陽などで知るのであると。

然し興味ありと思はれる口碑は、昔の役場は濱の崎にあり、支那から船が來れば烽火を揚げて各村に通知したと云ふことである。

又海岸には今耕地があるけれども、以前は芝草(Kusajiri)があつて牧牛を放つたものであつた。濱川氏の家でも十二三頭の牛を有して居た(牛ばかりである)近年は開墾を進めて耕地化

した所が多く、牛も多少は存在するが、放牧しては耕地を荒すから今は繩で繋られる。口碑によれば海岸の放牧時代に異人 (Olebo) が船を寄せ又物や洋服を呉れて牧牛を取去つたとの事である。

久米島の教育程度は如何と聞くに、氏の調査によれば、久米島の全人口約一萬人中現在中等學校に學ぶもの一〇五人、高等程度の學校に學ぶもの一〇人であると云ふ。

濱川氏邸で中食の御馳走になる。落着いた舊家で大史氏家譜系圖を所藏して居られる。里芋の一種田ノ芋を黒砂糖で煮たものは殊に珍らしく賞味したのである。

氏の談に具志川村は毎年入口増加し、小學校に於いても毎年一學級増加し、現在二十學級あるとのことである。

村には高齢者多く六十五歳以上のもの二二〇名あり而してその三分の二は女子であり三分の一が男子である。最長年者は九十八歳(女)次は九十三歳(女)次は八十九歳(女)次は八十六歳

(男)であると。

二時辭して宇江城に向ふ。仲地には帶狀構造を有する火山岩の露出がある。然しその岩質は全く島島北方の安山岩と同様である。植物としては横、椎などを見る。又ハマレイシ(方言クハレイシ)が植えられて居る。又濱川氏邸で御馳走になつた田芋が田圃の中に植えられて居る。

具志川村には砂糖畑に防風松林が植えられて居る所がある。矢張防風林の有無により作物の收穫に良否があるのである。尙此の邊には土語レーフと稱する樹が自生して居る。那覇地方では之れをウエンツノミミと稱す。ウエンツとは鼠のことである。

具志川字より仲村渠オカンダケに向つて、左側火山集塊岩の露頭を見る。

仲村渠に排寒櫻あり、濃い桃色の花を着けると云ふ。又彼岸櫻あり、白い花を着け一月より二月にかけて咲くと云ふ。

田幸タコウより宇江城に至る邊の道路は酸化鐵のため赤色を呈し、松及び砂糖蔗の青色と映えて美

第一圖

しい。第一圖は田幸より南七〇度東に宇江城を望んだ所で、向つて左が宇江城の本丸であり、近景は砂糖と唐芋の耕作を示す。山は松山である。此の地の地質は火山岩であるが（標本を採取）又此の邊にもアロール（ト）葛の材料）も作つて居る。



宇江城聚落の附近には砂糖蔗の外に稲

第二圖

で見える。因みに鳥島には鳥糞が多いと云ふ。宇江城の聚落では飲料水は泉から得て居る。かかる泉は同聚落に四個ある。第二圖はその泉を示す。



を作つて居る宇江城址には本丸の絶壁の石垣が残つて居る。此所からは正北方に鳥島の無人島ま

民家の入口にはヒツブと稱する目隠しを置く。或は網代を用ひ或ひは生垣を以て之れに代へることもあるが何れにしても之れは支那式と認めなければならぬ。

宇江城には會場がある。晝は若い女が相集つて絹を紡ぎ、夜は男の若い衆が寄つて話すのである。此の制は昔からあつて昔は此の會場のことを村屋ムラヤと稱した。此の村屋の前には榕樹カラヤ（方言ガジュマル）などが植えられて居り、南國の色彩濃厚である。

宇江城に比屋定ヒヤサマ小學校がある。校長宮城徳清ミヤキトクシヨウ氏に面會し、その談話を聞く。

此の村では人口減少の傾向があり、中學校に學ぶもの現在四人、他に卒業生が一人あるのみである。

宮城氏より聽いた民俗的事項は民俗學第三卷第四號（昭和六年四月）に録して置いた。

尙久米島に於ける氣候を知る上に參考となる事實として、昔は雪が降つたことがある様である。老人の言ふ所によれば、寒い日に綿の様な

白いものが樹に止まり又地上に積つたと云ふのである。霰は今でも時々降る、二月から三月にかけて降ることがある。然し今は昔よりも多少暖かくなつたのであらうか、唐芋（カヅラ）は以前は三月から後でなくては植えられなかつたものであるが、今は年中植えられると云ふのである。因みに唐芋の蔓をカヅラと云ひ球をイモと云ふのである。

尙氣象に關しては堂大屋（ドーナウフヤ）が二十七年間觀測の結果を纏めて此の地方の氣候を結論したものが今も残つて居る。彼れは一種の地方氣象學者であつたのである。

第三圖は堂の大屋が觀測に用ひた太陽石と稱するものである。長さ二米幅一米半、高さ一〇八米の安山岩の自然石を用ひ、表面に二條の刻線を有して居る。太陽石のことを俗にオテラインと稱して居る。

宇江城の拜所を一ヶ所觀る。大小八個許の火山岩の石が敷かれ、そこに九個ばかりの珊瑚石灰岩で作つた香爐が不規則に置かれて居り、之

第三圖



れを拜する時に座る疊の代用にクバの葉が三枚ばかり敷かれて居る拜所の全幅は僅かに一米位である

甚だ原始的のものではあるが、香爐の存在は何かしら佛敎的要素の混在を物語る様である。

祝が之れを拜する時は草を冠(カブイ)の形に作り、或ひは冠の形には作らず、そのまゝ頭の

上に乗せて拜するのであると。

此の邊にサルマメガキなる柿の一種がある。

一名澁シとも云ひ盆に使ふ。

仲村渠には鬪牛場がある。舊七月十六日に鬪牛が行はれる。具志川にも鬪牛場があり、此所では舊九月二十六日に行はれると云ふ。久米島伊豫宇和島、伊豆大島の鬪牛の間に何か關係が求められないであらうか。

八時歸宿、十一時就寢。

七月十三日 午前六時半起床、八時出發。鳥島聚落の東端に鯉節製造所がある。之れは鳥島人の經營する所である。此の邊に一昨夜ハブが出たと脅かされる。その代り鯉の腸も御馳走になる。肺病助膜でも直ぐ癒ると云ふのである。此の邊には随分澤山の阿檀が自生して居る。

第四圖は之れを示す。之れを蒸して纖維をとり帽子に作る。

大田では稻藁を材料として原始的な製紙を行つて居る。包紙に用ひ又錢紙に用ふる。七月盆の時など錢型を打つため打紙(ウチカビ)とも云

第四圖



ひ、又
靈前に
焼く故
アンヂ
カビと
も云ふ
アンヂ
はあぶ
る意で
ある。
此所の
家では
クバの
葉を壁
に用ひ

て居るが、その中の土間に紙張板を藏して居る兼城の地盤は隆起珊瑚礁である。此所に兼城の拜所がある。第五圖はその拜所の入口であるが、矢張神々し感じを與へることは事實である

第五圖



此所の鬱蒼たる南國樹叢の影で兼城の祝が祈りをして見せてくれた。祝は今年七十歳の新里鍋(チンザト・ナビ)女である。

此所の拜所の祭りは五月と六月とにある。五

月二十

五日の

祭をグ

ンガン

チウマ

チと稱

し、初

穂をと

つて五

穀を祈

るので

ある。

六月二

十五日

の御祭

はルクガチウマチと稱し新穀を奉る。此の時は朝早く祝イハヒがカミンチュ七人を伴ひ宇江城に至り、宇江城の祝と共に祭をする。カミンメは兼城に七人あり、祝と同様何れも女子で、祝と同様の服装をなし、祝の音頭でウムイを唱へるのである。カミンチュは士族でもなく百姓でもなく、カミンチュと云ふ獨特の階級である。

兼城の喜久里キクザト氏邸に至る。これも濱川氏と同様久米島の舊家であつて、乾隆貳拾參戊寅年頃よりの口上覺書を藏し、又元祖由來記喜久里記を藏せらる。後者は巫馬氏世系圖とも云ひ又巫馬姓家譜とも云ひ、之れによれば喜久里家元祖教道は國頭里主であつたことを知る。

喜久里氏に於いて、黒砂糖、茶、西瓜などの御馳走になり、又その邸宅の間取などスケッチする。

兼城では唐芋から澱粉を取つた残りの滓を丸めて球となし乾して居るのを見る。恐ろしく食糧を儉約するのを現實に知るのである。又紬の原料を紡いで居るのを見る。第六圖は澱粉滓を

第六圖



が乗つて居る断面を見ることが出来る。又嘉手苧川左岸の珊瑚岩の中に甚だしく砂質の所が認められる。共に岩石の標本をとる。

此の邊は最近幾分沈降したのではなからうか

乾して居る所を示す兼城より嘉手苧に至る所の河の右岸に安山岩の露頭がありその上に隆起珊瑚礁

珊瑚礁の堆積後地盤の隆起したとは隆起珊瑚礁の存在によつて明かではあるが、嘉手刈川河口の地形は明かに溺れ谷の地形である故に珊瑚礁の隆起後幾分地盤は沈降したものと考へられる

第七圖



のであ
る。第
七圖は
嘉手刈
川河口
沈水の
地形を
示す。
左岸よ
り河口
を望む
のであ
る。對
岸の白
斑は沖

繩獨特の墓である。墓は多く白色の珊瑚石灰岩を以て作り、附近には松や蘇鐵などを植えて居る。

此の邊には唐芋、砂糖蔗が作られ、又その他に煙草や南瓜カボチャや稻が作られて居る。

砂糖蔗は島外に輸出するのであるが、勿論一部は島内で黒砂糖の製造に用ひられる。嘉手刈には貧弱ながら砂糖製造小屋がある。

植物として特殊なものにババヤ、黒木(クルチ)ハリギリ等があり、ババヤは煮て食し又漬物として食するに心臓の薬となると云ふ。黒木は蛇皮線の棹に用ひ、ハリギリは桐の一種であつて葉柄にとげがあるが建築材料に使用せられる。

嘉手刈には昔拜所があつたが今は廢せられた但し伊敷索城址に至ると拜所があると云ふ。

此處にも會場があるが、之れは上述の如き用途に宛てられる外に夜宴會に用ひられることもある、普通は協議の時に用ふるものであると云ふ。

民家にはヒツブンを珊瑚石灰岩を積んで作った所がある。又道路の突當りの所には石敢當イシケンを置いて居る。之は大體丁字路の所に多く物よけの意と信ぜられて居る。

久米島小學校に至る。此れは嘉手苧、儀間、山城の組合學校で、高等科を合して四五七名の生徒を有して居る。二ヶ年に一學級増加の傾向があると云ふ。而して、此の組合から中等程度の學校に學ぶものは男九名、女四名であると。

此の地方の職業は農業が主であつて、漁業は盛でなく僅かばかり近海漁業が行はれるのみである。

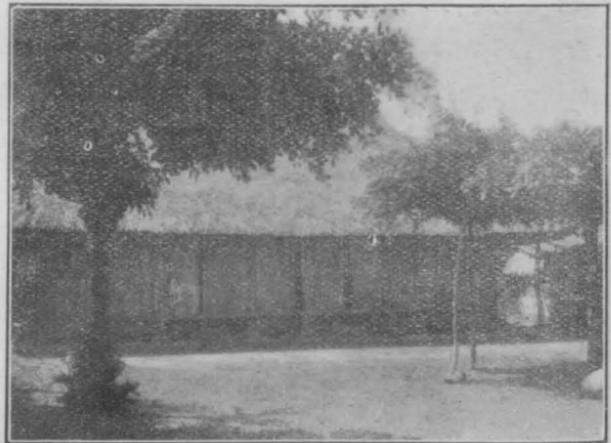
久米島小學校には山城粘土層グズク發見の蟹の化石を藏して居る。

儀間にも會場があり、矢張溶樹(ガジュマル)等を植えて居ることは前記宇江城の會場に於けると同様である。第八圖は之れを示す。

儀間の東方には安山岩が露出して居る。

山城では飲料水は泉によつて得て居る。此の泉は帶青色火山岩の礫よりなる礫層間の砂層厚

第八圖



さ一尺位の所より僅かに湧き出すものであつて側には大きな火山岩の轉石を置いて水桶などを置くに便じて居る。例年九月にカーマチを行ふのであるが、九月以外にも行ふことがあると云ふ。

山城にも拜所がある、一ヶ所の拜所では松の木の下に三本の石を置いて居る。里にも一ヶ所

あり、此處では火山岩の石を四本立て、珊瑚石灰岩で作つた香爐が四個置かれて居る。そしてその上には竹と萱で屋根を葺き、椎シノの柱で支へて居る。五月祭にしつらへたものである。

山城に化石層がある。此所の地層は上部は火山岩の礫であり、その下に二層の泥岩があり、泥岩の下に砂岩がある。泥岩から蟹の化石を産するのである。層位は水平に近い。

曲マカの聚落は本島より砂糖耕作のため移住し來つたもの、作つた新村である。道幅も廣く、その割に家屋は貧弱で移住民の村らしい感じを與へる。砂糖栽培を主要な生業とするが副業に養蠶を行ひ又山羊を飼つて居る。此の村で聞く山羊の鳴き聲は如何にも哀調を帯びて居る。

比賀の村外れに競馬所がある。之れは何か祭事と關係あるかと思はれるが、實際は比賀には拜所もないと云ふ。

比賀には久米島としては珍らしい商家が一軒あり、クバ笠を賣つて居るのが目に着く。此のクバ笠は南國的色彩の濃厚なもので、之れは久

米島でも作られるが、多くは宮古八重山から來るもので、一箇八錢位で賣られて居る。

比賀の聚落では家に生垣があり、その間に當る所の福木又はクバの生木に標札を打着けたのを多く見る。珍らしい情景である。

比賀で聞いた話によれば、久米島では九月各戸により日は異なるが、祝を招いて火の神を拜した後元祖を拜する。これをクングガチウガンと稱すると云ふ。

儀間では田圃で紬を染め之れを川で洗つて居る所を見る。之れは染料で染めた丈けでは澁茶色であるが、之れを田圃に入れると一時間程で黒くなるのである。泥に浸しては洗ひ、洗つては泥に浸すことを繰返すのである。

兼城では祝を招かず、香を上げないが、カーマチは各戸共行ふと云ふことを聞いた。

八時宿に歸り、入浴の代りに海に入り、九時食事、十一時就寢。

七月十四日 七時半起床、九時出發。鳥島で豚を屠り其の肉を市場で賣る所を見る。屠る時

第九圖

の聲は如何にも哀れであるが、その肉が上肉百六十匁六十錢である。第九圖はその屠殺市場である。

大田の村の辻で烏賊を賣る女を見る。一匹十



錢位で賣つて居る。久米島には別に魚屋がある譯ではなく、こゝして村の辻で魚が賣れるのである。

第十圖



を以て作り、之れが同時に飼主の便所となつて居る。牛小屋は珊瑚石灰岩の柱に萱の屋根など葺いて居る。

大田では飲料水は堀井戸によつて得て居る。

第十圖は之れを示す大田にも會場がある。

大田では牛と豚を飼つて居る。豚小屋は珊瑚石灰岩

鳥島には共同井戸がある。之れも堀井戸で周圍には阿檀、榕樹(ガジュマル)等を植え、石油罐で水を汲み上げて居るのを見る。此所では正月元旦にカーマチを行ふと云ふ。第十一圖は鳥



島の共同井戸である

鳥島の西端に寺があり、境内は石塀を以て圍み、其中に拜所がある。然し之

れは大體新らしい式のもので、原始的の形式を備へては居らぬ。鳥島は大部分近年の移民の作つた聚落である。

民家に憩ひ主婦と近所の女二人、西瓜賣りの女一人と語る。その話しを左に録す。

衣物は芭蕉及び阿檀の葉から作る。家屋は椎材(セイジヤイ)を以て作る。生業に就いては女が薪を取り又芋を作る。男も農業はするが二十歳から三十五歳迄の健康なるものは鯉漁に出る大體四十歳以上のものが農業するのであるが、四十歳以上のものでも漁業に出るものもある。食物として特種なものは鯉の臟腑である。鹽漬けにしたものを甘酒(アマジャケ)に入れて食す。一升五十錢位で肺病の薬として内地へ出す。甘酒は甘蔗から作り一合五錢であると。常食は主として唐芋である。而して泡盛は中々愛用せられる。男は普通二十五歳、女は十八歳位で結婚する。鳥島には祝二人、カミンチュ五人あり正月(ツウガチ)五月(グンガチ)六月(ルクガチ)九月九日(クンガチ、クニチ)にウマチがある。

日用品として南國的色彩のあるものはクバ（コバ）で作つたコバガサ及びコバウツワ（團扇）である。

人間は到底も親切で、持參のキャラメル、チヨコレート、辨當などを與へると隣家の鍋女（ナビ）が唐芋の蒸したのを持つて來て呉れるといふ風である。芋の赤色のものを方言 Hanauti と稱し九十日で成熟する、白色のものをシルクラガと稱し、之れは六ヶ月しないと成熟せぬと云ふ。

久米島にもアンガーが居るから注意せよと云ふ。これは大島郡、八重山方面より來るもので南蠻ガサと云ふ病氣を持つて居る。此の病氣になると關節の内部に出ると云ふ。その外梅毒（ベンドコ）と云ふ病氣を持つて居ると。元來の久米島には病氣はない。醫者は儀間に内地人一人あるばかりと云ふ。

言語は内地の都會人の言葉は解するが、鹿兒島の田舎人の言葉はもう解らぬと云ふ。

鳥島の拜所はナナオタキ・ジンサ（七岳神社）

第二十圖



と云ふ。神社と云ふのは餘程日本化したものと思はれる。

色々世間話を聞いて此の家（中宗根山一ナカジヨネ・ヤマ）を辭す。拜所と、移住記念碑と御寺を背景にして中宗根山外四人の女を撮影する。鳥島西端の海岸に浮石の打上げられたのを見る。

何處かに海底火山の噴火でもあつたものか。

鳥島西部、前岳(マエタキ)の裾野には阿檀、蘇鐵が自生し、其の間に墓場が作られて居るが作物としては、唐芋、砂糖蔗が植えられ、又少しではあるが、トীগが作られて居る。第十二圖は鳥島より大原に至る道路左側に見る蘇鐵の自生情態を示す。

鳥島より大原に至る分岐路の左の道路の右側に洞窟があり、頭蓋骨その他の人骨片を見る。恐らく之れは洗骨して納めた古墓ではなからうかと思はれる。墓の周圍には蘇鐵が植えられて居る。恐らく此の古墓は琉球の墓では原始的の形式を示すものであらう。地盤は隆起珊瑚礁の珊瑚石灰岩であるから、洞窟は自然のものと思はれる。之れを墓地に利用したものであらう。

大原三角點の附近で聞いた話しに此の邊では霰は降ることがあるが雪は降らぬと云ふ。

大原には拜所がない。會場があつて二宮尊徳翁の像を置くと云ふ。大原は矢張り新しい移住民の作つた聚落であること確かである。その

會場と云ふものは戸主が集つて協議するのに用ひられはするが日中は小學生が學校から歸つて勉強する所となり、夜は青年が夜學をするのであると云ふから大分本來の會場と異つて來て居る。尊徳像は舊五月十七日村人が集つて參拜するのであると。之れも餘程日本的である。拜所がないから祝も居ない。村民は首里那霸方面から寄留したのであると云つて居る。

北原も大原と同様の性質の聚落で、大原から分離したものである。崇拜するものは何もない毎年八月十五日(舊曆)闘牛を行ふのである。日用品を賣る家が二軒ばかりあるが他は凡て農業に従業する。

北原と大原との境でも作物に對する防風松林を有して居る。而して農業には牛を使用する。野原の芝生や防風林中に緊いで草を食まして居たり、又溜池や海で牛を手入して居るのが見られる。

北原には隆起珊瑚礁の露頭があり、其の露頭の比較的高く耕作に適せぬ様な所に多く墓場が

あり、其處には蘇鐵その他の植物が生じて居る。北原より具志川に至る道路の左側の墓地中の一基の墓は隆起珊瑚礁の基盤を利用し、珊瑚石灰岩を積んで墓となして居る。蘇鐵その他の樹木が多く植えられて居ることはこれまで記載したものと同様である。恐らく此の墓は上記の隆起珊瑚礁中の洞窟を利用した最も原始的な墓の形式から一步進化したものと思はれる。

具志川に上る所は隆起珊瑚礁下の基盤が露出して居る。下部は安山岩の集塊岩であり上部には大なる安山岩塊を見る。而して安山岩よりなる地質の所は松の多い森林地となつて居り、此所に具志川移轉記念之碑（新垣良英撰並書）なるものがある。

仲地にも福木の生垣があり、生木に門標を釘打ちにしたのを見る。

仲地の飲料水は共同井戸から汲まれる。水を石油罐の桶で運ぶのは新制に違ひないが、此の共同井戸が、仲地聚落の根元であることはどうも眞實らしい。勿論今は個人の堀井戸もあると

云ふが。

カーマチは舊六月共同井戸の所で行はれる。又泉の濁つた時などには井戸替をしてカーマチを行ふ。此の共同井戸の外に仲地には尙一箇の泉があり、及別にチンベの後にカミギーなる井戸があるが神井であつて普通人は汲むことが出来ぬ。マチイ（祭）の時に之れから水を汲んで祭するのであると。

仲地の道路の分岐點に松の木があり、此の附近に會場があるが、此の二叉路の劔先の所に石敢當がある。

西銘に拜所があるといふ。

七時半宿に歸り海に入り夕食、十一時就寢す。今日濱川昌俊氏が訪ねられての話しに、大原の北部にカックイと稱する洞穴があり、又その隣りにヤジャヤなる洞穴があり、西銘の西部にはヤツチと稱する洞穴があり、陶棺及び人骨が納められて居る。此等は大なる代表的のものであるが、之より小規模の類似のものは尙他にも多い。ヤツチには以前南蠻釜（ナンバンガミ）が

あり中に人骨があつた、之れに酒を入れると味が甘く、之れを南蠻酒と云ふのであると。

又墓の龜甲形をなすものはカーミヌクーと稱し、四角形をなすものをハーフ(破風)と稱するが、カーミヌクーは舊家の墓に用ひ、今も作るのと。

七月十五日 午前六時半起床、八時出發。土地の人漁業組合の仲村渠氏と語る。

鳥島の平たい舟はテンマと稱し之れは那覇から買入れたり又は那覇から大工を招いて作らす又獨木舟があるが、一本杉で作つた上等のものは七、八百圓、普通のは百圓乃至二百圓である。テンマは此の島の松の木を用ふるから比較的安價で精々二百圓位であると。

鳥島の鰹漁は副業的に行はれるが、年四萬圓に達する。魚は那覇水産組合に納めるのである。鰹漁用の發動船が三隻ある。尙、眞泊にも一隻の發動船がある。此所では本業として鰹漁が行はれるから一隻で年二萬圓を擧げる。久米島では此の二ヶ所で鰹漁が行はれるが、那覇への輸

出は製造してからである。製造人としては水産學校出の村人が居ると。大正五年頃内地人が太平洋漁業株式會社を經營したが數年で失敗したと云ふ。

鳥島移住に就いて語る所によれば、明治三十六年硫黃島(沖繩と大島との間で鳥尻郡内鳥島)に地震があり次いで噴火があり軍艦高千穂が之れを救援したが、鳥島住民は同年十二月久米島に移住した。具志川村字大田の西に字仲泊ありその南に占據した。之れを字鳥島と云ふのである。硫黃島時代の祖先の骨は全部墓より發掘して持來り鳥島の寺に合葬した。かくして硫黃島人は殆んど全部此の鳥島に移住したのであるが硫黃採集人夫として百人位は残つた。(硫黃の外に挽臼を名産として出す)

斯くて鳥島聚落は殆んど全部硫黃島からの移民によつて形成せられて居るが、その中二十軒位は後沖繩本島から移住して來たものである。尙移住に就いては、大原は明治二十五年以前首里那覇の住民十七軒が監督酒井氏の下に移住

し來つたものゝ作つた聚落である。其れは多く囚人であつたが、その後縣下の至る所より普通人も移住し來つたのである。

久米島では鹽と煙草は專賣でなく、自由に製造し栽培し得るのであるが、勿論那覇などへ持出すことは禁ぜられて居るのである。

北原の洞穴には昔盜人が棲み、牛などを盗んで食つたと云ふ傳説があり、洞穴の入口には骨が澤山あると云ふ。

鯉の腸には唐辛子(コンソ)を交せて食ふに味よろしと云ふ。

以上が仲村渠の談話である。

鳥島より兼城に至る所の橋を小港江(大正九年八月架設)と命名して居る。些か支那式である。

嘉手苅川左岸には隆起珊瑚礁があるが開墾せられて居らぬ。

嘉手苅に久米島バプテスト講義所があり琉球語の聖書を用ひて居る。傳導の手は此所まで及んで居るのである。但し内部では絹を紡いで居るのを見るのも一寸異様の景色である。大正十

四年十一月の創立である。

儀間も一部分は新しく開けた所であらう。所の者でないから所のことは解らぬと云ふものが可なり多い。日用品を賣る店も可なり多く散髪屋湯屋まであるのは船着場の關係であらう。

儀間より山城に至る所は安山岩よりなる。集塊岩が卓越して居る。而して之は水中に堆積したものが、不明瞭ではあるが層序をなして居る。山城の邊山林が多いが、畑もあり、稻、砂糖蕉、唐芋、芭蕉等が作られて居る。

山城より曲マカリに至る村の端に古松を多く見る。恐らく山城城址であらう。

曲に近く砂岩中に蟹及び貝化石を採集する。曲の南四五度東の方向の海岸に砂丘を見る。勿論大きな砂丘ではない。

比賀に於いて村役場を訪れ比屋定氏に面會二時から四時半まで色々な材料を見せて頂く。謝名堂の聚落にも福木の生垣が非常に多く、

且立派である。

奥武の南方には砂丘がある。遠方からもよく

認められる。珊瑚石灰岩の砂で出来て居るものらしい。

泊の北方は若い砂層よりなり貝化石を包含して居る。泊より宇根に越す所の峠に斷層があり宇根に於いては火山岩が之れに乗つて居る。此の斷層のある層は砂質の粘土層よりなる。

眞謝の聚落も立派な福木の生垣を有して居る家も中々立派な構えである。

眞謝でクバの葉で水汲用の釣瓶を作つて居るのは一寸珍らしい。

眞謝には稻田が多く見られる。山には椎及び萱が多く馬で之れを里へ運ぶのが見られる。薪用である。山ではホトトギスが聞ける。

眞謝の西北には水成岩の上に火山岩があり、此の火山岩は石斧の材料に使はれた。偶然路上に一個の石斧を發見したのである。

阿嘉の山には松と琉球竹が多い。琉球竹のことは又山竹と稱せられて居る。

上阿嘉には恐ろしくつぎの當つた着物を着て居るものが多い。此所では着物が實に貴いもの

なのであらうか。生業としては砂糖蕉を植え、黒糖を製し(砂糖小屋あり)、黍、唐芋を作り山羊、雞を飼ひ又馬に食ます草を運び、牛を放牧し、練糸(ネリイト)を揃へ、糸を紡ぎ、嗜好品としては煙草を栽培して居る。

上阿嘉、比屋定間の道路からは堡礁が銀の鏤の様な格好に美しく海中に横たはるのが見える。此の道路の下は珊瑚礁である。比屋定の聚落はその上の海蝕臺地の上に位置する。而して之れを見下す位の高所に水田があるが、それは一に水利があるからである。勿論之から下にも上から水を落して水田を開いて居る。唯海との境目には草地があつて、其處は牛の放牧に利用せられて居る。

具志川に於いて更に一個の石斧を拾得し八時二十分宿に歸り、十一時就寢。

七月十六日 八時起床。足に豆が出来て歩けぬ。役場に至り村長、助役兩仲村渠氏に面會し村の統計書を借り受け宿に歸り終日拔書を作る。夕方海に入り、夕食後筆記を續け十二時就寢。

七月十七日 八時起床、十時出發。

西銘に掘井戸がある。

女は頭に物を載せて歩く。此の風習は島國に共通の様である。

宇江城の城は火山岩の地盤の上に石を積んで築かれたもので高い所に聳えて居る。城下には萱が一面に茂つて居る。

城下に観音堂があり二間四方「乾隆三十五年九月穀□、観音堂、仲里親雲上謹□」と記した額があり、又鰐口を有して居る。此所の字名を堂の内と云ふ。宇江城の字を堂とも云ひ、それから宇江城ウスケシヤウ城と仲城又は堂城と云ふ。

宇江城小學校に於いて聞いた所によれば、久米島の桑はキグハと稱し葉が小さく薄いが施肥せずよく成育する。之れを摘んで養蠶するのである。内地の桑は移植しても次第に萎縮して成育しない。然し所の生桑でする養蠶では勿論紬の材料全部が得られる譯ではない。絹を群馬、福島、滋賀、愛知、岐阜等より輸入するのである。一反に付き紬の利益は五圓であるが、之れ

から染代、紬代を差引けば純益は一圓である。一反を織るには一ヶ月を要するから一ヶ月一圓の純益であると。尙紬に關しては儀間に組合があると云ふ。

然し物價は可なり廉く、豚肉一斤(百六十匁)一等五十錢、雞一斤(生きたまゝ)三十錢、雞卵一個三錢であると。

比屋定の崖の下に共同井戸が二個ある。飲料水を得る外芋等を洗ふにも使用せられる。比屋定には芭蕉(バサオー)が植えられて居る。

比屋定から阿嘉に下る所は實に急な殆んど四十五度に近い斜面をなして居る。地盤は集塊岩であるが、蘇鐵が多く生えて居る。此の斜面の下部は砂岩よりなり、崖下で急に平かとなり、それより海岸までの間には水田が作られて居る。島内第一の良米を産する。灌漑水は斜面の等高線と殆んど平行の用水によつて得て居る。

兎に角此の急崖が舊海崖であることは略確實である。砂岩中には化石が實に豊富に發見せられる。而して此の砂岩の中に偽層でなく、不整

合が存在すること、而して兩系統共に水平でなく傾斜して居るかと思へば、殆んど水平な面があり、此所の地層は中々簡單ではない。

此の水平層に近い所では砂岩と泥岩とが互層し所によつて著しく石灰質で走向東西、南へ二度傾斜して居る。特に化石の豊富なのはその上部である。

その層序を見るのに、安山岩の岩塊が砂岩及泥岩層の上にある、而して珊瑚礁は此の安山岩の上に乗つて居るのである。此の層が珊瑚礁より古いことが明かである。

阿嘉の水成層は大部分砂岩よりなるが、少しながら礫岩層があつて砂岩層中に介在し、而して礫岩上の砂岩中にも具化石を發見する。その水成層中の不調合は所々に認められるが、最も明瞭なるものは阿嘉の瀧の西方に認められる。小斷層も所々に認められる。

水生岩と安山岩との境界に於いては、下部に安山岩があり、其の上と同岩質の礫が乗り其の上に水成岩が乗つて居る所が認められる。此の

水成層は安山岩の噴出より新时期のものと考へなければならぬから、水成層には安山岩噴出以前のもの、以後のものと新舊二系統があることを知るのである。

此の急崖が舊海崖であることは阿嘉より比屋定の方面を見た地形に最もよく現はれて居る。舊海崖の下部に海蝕洞の地形が残つて居り、それと現海岸線との間には低い海蝕臺地が存在するのである。

此の海岸の平地には芝生があり、牛を放牧して居るが、芝生の中に水田があり、又粟を作り傾斜面の麓部には芋、芭蕉等を植えて居る。芝生の基盤は珊瑚礁か、安山岩である。

此の海岸の砂岩層の中に洞穴がありその入口には石を積み、その中に墓場利用せられて居る。此の墓場に祭られた者の子孫は今も尙絶えては居らぬ。子孫のものは正月十六日手製の御馳走などを供へて祭るのである。七年に一回は此の墓の入口を開いて祭する。之れをゴーリと稱する。以前は牛を殺して祭つたが、今は

多く雞又たは豚を殺して供へる。現に大正十四年にゴリーを行つた。時期はその年の十一月であるが、紙を四つ折にして骨の上に置く。

かゝる絶壁の古墓は宇江城、比屋定、阿嘉のみに存し、他には存在しない。

勿論此の絶壁には新しい墓も存在する。

此所の海岸にも浮石が発見せられる。先島に於ける噴火の産物で昨年の夏暴風で畑の上まで打上げられたのであると。

海岸の珊瑚礁の上に糸満の獨木舟を見る。糸満人は此所にも活動の手を擴めて居るのである。阿嘉の海岸絶壁を切つて砂岩中に斷層が認められ、其處の上を川が流れ落ちて瀧をなして居る。北風の際は水が吹き上げられて奇觀を呈すると云ふ。

阿嘉には南洋から流れ來つた椰子がある。それを酒入れ、水入れに使用して居る。又頭髪を洗ふのに田の泥を用ひて居るのは珍らしい。

阿嘉より東部は基盤より全部火山岩よりなり之れが直ちに海中に入つて居る。その岩石を採

集する。

阿嘉より真謝に至る道路の右側の山は玄武岩よりなるか、安山岩にしては恐ろしく黒い緻密な岩石である。岩石剝片用を採集する。道路の左側の山は安山岩であらう。此の岩石も採集する。

此の山道を降つた所は、下部粘土、上部赤色の柔かい砂岩層よりなり、走向東西、北へ三度傾斜して居る。而して安山岩は明かに此の互層上に乗つて居るのである。

真謝の村外れでは此の水成層は粗粒黄色の砂層となるが、此れが粘土、砂の互層の下部に來るものである。

真謝では多く紬を織つて居る。

真謝に寺があり支那式の佛像三體を祀つて居る。二體は脇侍である。此の寺をボサローと云つて居る。菩薩堂である。境内に「琉球國新建姑米山天后宮碑記」あり「昔乾隆二十一年歲次丙子孟冬月、周煒恭撰」とある。久米島でも真謝は殊に支那との關係が深かつたものと思はれ

る。

眞謝の東をウチャムと稱し地盤は水成層よりなり、それより泊に至るまで全部水成層よりなる。

謝名堂にも會場がある。

此の邊では福木で生垣を作る外に又竹で編んだ網代を以て生垣を作つて居る。之れに用ふる竹をヤンバラダケ(山原竹)と稱する。

謝名堂の道路の左側は砂層よりなり、此の砂層は成層せず、色は黄褐色である。

比嘉にはヨーナ樹があり、又萱にはマカヤ、グヒチ、タキ(竹であるが俗にカヤと稱す)の三種類がある。

山城では七月と云ふに早や稻を刈つて居る。南國ならでは見られぬ情景である。

山城から儀間に近い所の火山岩は水中に堆積したのか礫は丸味を帯び成層して居る。但し全く水平ではなく、礫は角礫が角のとれた程度のものである。又砂質の所もある。

九時宿に歸り、十二時就寢。

七月十八日 終日村誌を見る。

七月十九日 午前六時起床、八時那覇行の發動船に乗る。

同船の仲村渠氏によれば、チンベを又タキンバイとも云ふ、即ち君南風である。祝の奏するウムイは各字によつて多少は異なる、例へば沖泊(ナカトマイ)及び兼城(カニグスク)では津浪に對する祈りがあるのに對して、山邊の字ではそれが無い如きこれである。

兼城の海上より見るに、伊敷索城址の地形は明瞭な隆起珊瑚礁の地形を呈して居る。海際には明瞭な海蝕洞の地形を見る。簡単なスケッチをなす。

仲村渠氏によれば、嘉手刈の鼻崎(ハナサキ)を唐船堀(トーシングムイ)と稱し、此所には海蝕洞?が多いが、以前支那船が多く來た。西洋船も傳説によれば三百年以前より時々來り、牛などを徴發して行つたと云ふが、現在七十歳の老人が西洋船の來たのを記憶して居ると云ふ。又たヤマトイクサ(日本戦)があつて之れには

久米島人が勝利を得たと云はれて居る。恐らく之れは海賊との戦であらうと考へられて居る。發動船へは牛も豚も人もハシケで運ばれる中々大變だ。小規模でも築港の必要があると思ふ夕方那覇に歸る。

七月二十日 沖繩縣立圖書館に眞境名氏を訪れる。

氏の意見によれば、久米島に來たオランダなるものは米國の捕鯨者であらうと。

久米島では反物を租となし之れを貢布と稱し宮古、八重山の細上布(麻)と共に古來有名である。

沖繩の豚コレラは外國種の輸入せられてから

のことで、そのため豚が全滅した所がある。地方の豚は所謂島豚と稱せられコレラに對する抵抗力が強いが、今は段々少なくなつた。

久米島の牛は外國種であらうと云ふ。

眞謝の昔の役場は昔の在番奉行の有つた所であるから書類なども多く残つて居る筈である。凡て以前の役場は海岸にあつた。此所が交通上最も便利であるばかりでなく、外國船に對する關係からでもある。

程順則の時刪封使と共に豊盛額と云ふ天文学者が琉球に來たことがある。太陽石のドウノウフヤの事蹟は此れと何等かの關係はないかとのことであつた。(昭和六年五月二十六日記)